



ひろひろ

NO.7 2018.9.28

9月6日朝。北海道で夜中に大きな地震が起きたことは知らずにいつもの時間に起床。ネットのニュースを見て慌てる。震度の大きさと共に、震源地にビクッとす。すぐに情報収集と連絡スタート。北海道の東側、釧路に住む母と弟からは停電はあるが大きな被害はないという報告が届く。道内全域が停電ということがわかり、母と弟には、断水対策など今後に備えておくべきことを伝える。発電機もあるし、食料もあるし、近隣つきあも盛んだし、大丈夫そう。

息子2人が住む函館の状況は？中3の鼓太郎、中1の関太が生活している寮のホームページには、大きな被害はないが停電であることが報告されている。携帯電話もスマホも持っていないので、本人達には直接連絡はできない。まあ、大丈夫なのだろう。でも…、という不安が浮かんでくる。停電の中、朝食は食べられたのだろうか。水はどうなっている？この時期だから寒さはまだ平気だろう。500人近い中高生男子が生活する寮、混乱していないのか？停電はいつまで続くだろう。そうだ、泊原発はどうなっている？

午後になって鼓太郎からは自宅に電話連絡があったとのこと。寮にある公衆電話が無料でかけられるようになり、台数の少ない公衆電話の前に生徒たちは並んでいたらしい。「朝はパンだけだったけど食べられた。水道のポンプが停電で止まって、水は出ないけど、グラウンドの水道からホースつないてなんとかなってる。まあ、大丈夫！グラウンドで水のシャワー浴びて冷たかった！学校休みだし、みんなで遊んでる。」と、興奮気味の明るい声での電話だったらしい。友達と一緒に非日常を楽しんでいるのだろう。

夕方には関太から電話。第一声で「なんか情報ちょうだい。」と、切迫したような声。「わかった。どんな情報がほしいの？」「函館の停電範囲と復旧の状況。あと、余震の可能性。それと、原発あるよね？それがどうなってるか知りたい。」こちらで把握できている限りの情報を伝える。寮の様子を聞くと、それぞれが自分のラジオで情報収集しているとのこと。「それだと電池が無駄になっちゃう。停電はどれくらいの期間が続くかわからない。何人かでひとつのラジオを聞くとかして、電池の節約して。非常時に電池、お菓子、体力は無駄使いたくないこと。」「わかった、みんなに伝える。」

非常時には、兄弟それぞれの個性が特徴的になるなあと感じる。非常時を楽しむのいい。冷静に情報収集し次に備えるのもいい。小さい頃から、ナイフや火おこしなど野外で生き抜くひと通りのことは教えた。ある程度の困難な状況でもサバイブできる技術と度胸は身につけているはず。仲間と共に生き抜けるだろう、と信じるくらいしか、遠く離れた場所から彼らにしてあげることはない。それでも、やはり落ち着かない。他に何かできることはないのだろうかと探してみるが、やはりない…。

結局、地震発生の日6日は停電復旧せず。二日目、7日(金)の朝を迎える。函館にいる高校の先輩からは、寮のトイレが詰まりだして、ちょっと状況が厳しそうなどの情報も届く。夕方、関太から電話。「帰省したかったら、帰省してもいいんだって。親と相談しなって言われた。」「どうしたいの？」「え、ちょっと待って。」どうやらそばに鼓太郎もいるようで、二人で相談している。「いいや、帰省しない。」「わかった。いろいろな状況を想定して、もう一度よく相談して決めて。18時半頃に電話ちょうだい。」この時点では、函館市内は徐々に停電が解消されていて、寮の停電も遅かれ早かれ復旧しそうな状況だった。ただ、余震の可能性は予測できない。その場合、泊原発はどうなるのかが、僕にもまったく見通しが立たない。帰省させるべきかどうか、迷う。

そして18時半頃、再び電話。今度は鼓太郎から。「あのね、やっぱり帰ることにした。でかい余震あるかもしれない。」「あ、帰ることにしたんだ？わかった。じゃあチケットとか手配する。」ほっとした気持ち半分、残って仲間と過ごしてほしかった気持ち半分。つくづく親というのは自分勝手だと思ふ。ただ、最終的には彼らの決断を尊重。自分の命は自分で守る意識を持ってほしい。

そんなわけで、結局彼らは8日(土)の夕方に軽井沢に戻り、9日(日)の午後には函館に戻っていった。家にいるときには「あー、余震こないかなあー。そしたら、函館に戻るの遅くなるよね。」と不謹慎なことつぶやいていた。函館に戻る前に、家にある防災グッズの中から、それぞれ必要だと思うものをピックアップして荷物に詰める。鼓太郎は必要最小限、関太は念入りに。この差が、本番でどう影響するのかわからない。もちろん、実際にこの防災グッズが活用されないほうがいいのだが。

子どもは、いつまでも子どもではない。それぞれのタイミングで、親との距離を調整していく。我が家の場合には、比較的それが早く、中学生や小4でぐっと距離を取っている。物理的な距離と精神的な距離。これらは、どちらが先ということではなく、頃合いやバランス。近くしたり、遠くしたり、浅くしたり、深くしたり。いろいろ試してみながら、その子、その家族にとってのちょうどよいところを探っていく。親にとっても快適な距離が、子どもにとっても快適とは限らない。その場合、親の快適を取るのか、子どもの快適を取るのか。答えは自明だ。そして、それは幼児期から親が意識していくべきものなのだ。今回の2人の息子の様子を見てあらためて実感した。

高くしっかり飛んでいるように見えるが、糸を切れればすぐに落下してしまう風。飛び方を教わり、危なっかしいが、しっかり自分で羽ばたこうとする鳥。もう一度、鳥がどう子育てしているのか、学んでみよう。約1名、まだビョビョ言っている(いや、言わせている?)のが我が家にもいることだし…。

(徐々に登場。生まれも育ちも北海道、しんさん こと 本城慎之介)

田畑

今年は夏の猛暑で稲の成育が早く、稲穂が黄色く色づいたのも早からずで、9月半ばには稲刈りも終るという予想と見ているけれど、まさかこのまま雨降りが続いて延期、延期に延びるとは…。毎年「異常気象」と言っているのは気がしませんが、まさに田畑の仕事は「お天候」様の「機械」次第です。手刈りの稲刈りは刈った稲を地面に置いて手で刈るので、地面がぬかるんでると稲をわらも泥にまみれてしまいます。雨のやんで2-3日晴れてしまえば地面が乾くと稲刈り代行に任ずるので、雨期天候予報を見ればお天候の様子についています。

息子2人の事情をよそに、ひろひろの森工事で雨でも田畑まで通って息子2人もTシャツは、大夢「早く稲刈りして全部すめに食べられようヨウ」が言いつつ、送迎無断に田畑を走り回って通っています。うしろと前を森を走り、泥と見渡せるこの場所は「あ！おおくりさん、あつちへ来て、行ってあげよう。」エマ「冷音ちゃん、羊ちゃん、草あげて？エマもく！」と遠くに見える友達が誘われて出かけている様子。羊ちゃんに草をあげて、羊小屋にまで入り、じつとさわらび(羊)と関わりを深めている人を見ています。

羊ちゃんも、ちよと話は変わりますが、小学校の運動会で見たことのある「大玉送り」のあの大玉を、ひろひろの運動会でも使おうと、借りられたらいいなとおおくりから声がかかったのは「前」のこと。「羊ちゃんも貸してあげたいから、小学校も大玉くらい貸してくれませんか」とヤマトさんから自線の発信があったので笑ってしまいました。Tシャツも羊ちゃんもエマも貸している中部小学校から「送迎は来世の事」とお誘いがあつたので、9月27日に出かけるといってTシャツも、その前日の夕、おおくりの帰りの集いで天音「明日、校長室に行きたい。」という「校長先生に大玉貸して欲しい。この手紙あてちゃんと言いたんだ。だから、貸して欲しいからお願いをしなさい！」とんも頼もしい。親戚「でも貸してあげたら、どうやって大玉持っていくの？バスが入口から入るといふじゃない？」羽根斗「わーさんの車にうたはら載せてあげよ。」「実は明日はわーさん行かないんだ。まじどうりさんと馬のラッキーの個人から。」一同「えー!?無理でしょ？車にうたはら!!」「さあどうして、どれくらい大玉はらって大玉を、ドキドキと明日を楽しみにしているおおくりのみんなには、空気を抜くと小さく(ほら大玉らしい…)ということも、内容にしておきたい。

さて、その頼もしいというTシャツ、どうしてTシャツのTシャツが？ももちゃんもエマも草をあげて、羊小屋で元気にしゃべっているか？ : 美和子。